

学校のちよつといい話 23

千葉県我孫子市立我孫子第二小学校

前校長 鍵山 智子



「級友の心に寄り添う生徒と の出会い」

今から二十年程前の学級で小学校から休みがちな女子生徒に出会った。入学式に会えず、当日、主任と管理職に相談し、保護者に連絡して家庭訪問にうかがった。母とは話ができたが、本人には会えず、母から「本人が行きたいときに登校させる」「共働きで忙しいため、毎日の連絡は入れない」と伝えられた。そこで、週に一度、学校の様子やお知らせは担任である私が直接訪問して届けたいと伝えた。「ご無理をせず」と話され了承頂けた。

その後、その生徒の家庭を訪問し、呼鈴を押し、反応がなければポストにお知らせを入れ、もし彼女がドアを開けて顔を出してくれたら、少しお話しすることにした。このことは学級の生徒たちにも伝えていた。

ある時、生徒から、「彼女がスポーツ好きなので、卓球部を紹介したい」とか、「手紙を書いたので、本人に渡してほしい」という声が聞かれるようになった。自発的に声をかけてくれた生徒は、人に優しく、誰とでも仲良くでき、リーダーとしての力も持っていた。よく気がつき、班の仲間にも声をかけて、彼女あてのメッセージや手紙を一緒に書いてくれた。

そうして、伝書鳩のように、何度か家庭訪問するうちに、たまに本人が顔を出して応対してくれるようになった。そのたびに手短かに学級の様子を伝えた。ある日彼女から「卓球部に入部できるか？」と、申し出があった。保護者の同意も得られ、管

理職と部活動顧問に本人の状況を伝えて入部することになった。教室に入るには勇気がいる様子だったので、彼女が卓球場や体育館、昇降口など、校内環境に慣れる時間を大切にした。卓球部に誘ってくれた生徒や仲間の支えもあり、土日の練習に参加し、学期末には平日の帰りの練習にも時々参加するようになった。

この学級の生徒たちとは、たった一年間の関わりしかもてなかったが、席替えや学級の係決めや班づくりなど、個々の生徒の思いや声を学級通信を通して伝え合い、学級全体でお互いを認め合う機会を意図的に多く作った。その中で生徒たちは、各班长を中心に、休んでいるいないに関わらず、お互いを支え合う成長した姿を見せてくれた。

たまたま私が転勤の時期となり、次の担任にこの学級の「支え合い」を伝え、バトンタッチした。本人を支えてくれた生徒や仲間たちとは、転勤後も時おり手紙のやりとりがあり、卒業までお互いを支え合う関係づくりを継続していることを伝え聞

いていた。そして、卒業式の一週間前、彼女は仲間たちと朝から一緒に学校生活を送り、卒業式にも参加して無事に巣立っていったと後任の担任から聞いた。この学級で彼女や仲間の生徒たちと出会えたことは本当に偶然であり、一年間ではあったが彼らと一緒に時を過ごせたこと、後任の担任に引き継いだことを今だに感謝する私がいる。

それから数年後、社会人となった彼女が、甥っ子が通う学校の運動会の日になぞなぞ時間をつくって会いに来てくれた。その時、彼女が発した「学校は大切だ」という言葉を聞いて、改めて学校と子どもたちについて考えさせられた。今日では、休みがちな生徒に対して、学級・学校にとらわれず、適応指導教室や様々な相談機関も支援している。学校を休むことで、生きるエネルギーを蓄え直し、次のステップを探す子どもたちに寄り添い、学校だけでなく、出会った人とのよい関わりが生まれると、生きる自信にもつながると思う。